

## 奈良県と北海道における実態調査結果の比較による 東アジアからの訪日客に関する分析

小松原 尚

はじめに

1. 東アジアから奈良県、北海道への訪日客の特徴
2. 観光的観点からみた訪日客の特徴
3. 訪日客の行動と利用満足度

まとめ

### はじめに

人文科学において、幅広く取組まれ、貴重な研究成果の蓄積をみてきた対象に、人口動態、人口移動に関するものがある。世界の人口移動の平時における大部分は労働力の移動と観光客のそれである。人文科学に位置づく、人文地理学においても労働力に関しては人口地理学、都市地理学、経済地理学、また、観光客の流動構造に関しては観光地理学において研究がすすんできた。

ただし、これまでのような都市と農村のような2元論的な考え方では近年の国土の利用については論じ切れなくなっている。観光行動の分析にあっても山間地域を都市圏における観光レクリエーション機能地域として位置づけ、需要者である都市生活者の山間地のレクリエーションにかんする関心、認知状況をしっかりととらえる必要がある。このような課題に対して、小松原(2007:87-98)では、大都市圏、中でも首都圏と関西圏におけるインターネット利用者へのアンケート調査を利用して、都市生活者の奈良県観光への関心動向について検討した。奈良県を取り上げた理由は、南部に広大な山間地域を抱えていること、そして関西圏の一角を占めており、上記の観点到合致すると考えたからである。さらに、小松原(2007:127-140)では、最南部、紀伊山地の中に位置する十津川村を事例として都市生活者の意識動向を探った。

一方、観光資源と利用者との関連性では、小松原(2007:21-38)にて、観光客流動を引き起こす要因となる観光資源の分布を、北海道を事例として整理し、観光客流動の季節性との関連性明らかにするとともに、国立公園の利用者を事例として、ミクロレベルの利用者の流動構造を明らかにした(小松原2007:51-53)。さらに、近年活発化しつつある、国境を越えた観光客の移動については、小松原(2007:13-20)が、北海道において、アジアからのインバウンド・ツーリズムの動向を概観した。さらに、清水・祖田(2005)も同様の視角からアプローチし、詳細な論を展開している。

以上のように近年の観光客の流動に関する研究には著しい進展をみた。ただし、これまでの研究成果を踏まえつつも、なお新たな克服すべき課題は少なくない。その中に、観光客の観光対象地への行動の起因となる情報に対する関心の形成と観光行動と通じて得た体験と意向に関する問題がある。情報提供と観光地のイメージ形成の点に関しては、日本の国内旅行に関して既に明らかにした(小松原2007:117-127)。しかし、インバウンドに関しては必ずしも十分とは言い難い。そこで本報告では、第1表に概要を示した北海道と奈良県における調査を利用して、標記課題にアプローチしたい。両地域を取上げる理由は、それぞれの地域が東アジアの国々に関してインバウンド招致活動を積極的に展開していること。さらに、北海

道にあっては、わが国有数の自然観光資源を有する地域であり、インバウンド招致にも積極的であること、また、奈良県はインターナショナルレベルの歴史遺産が随所にあり、人文観光資源の利用を検討する上で有為な対象であると考えられることによる。

第1表 調査の概要

		奈良県	北海道
対 象	訪日外国人全て	北海道外客来訪促進計画に掲げる対象国・地域（台湾、香港、韓国、中国（本土）、オーストラリア）からの訪日外国人来道者の中で、①新千歳空港から航空機を利用して離道する来道者、②北海道内の旅行会社が催行する訪日旅行に参加する来道者、③宿泊拠点地区の登録ホテル・旅館及びウエルカムインに宿泊する来道者、④案内所を訪れる来道者、に限定	
		夏季 2005年7月～8月 冬季 2006年1月～2月	
時 期 査	2006年9月～11月		
	面 接 聞 取 り	東大寺、薬師寺、法隆寺、明日香村周辺。 英語、仏語、中国語、ハングル語各1名づつ、調査員による。	①の対象者に対しては、新千歳空港国際線出発カウンター付近及び出発ロビー ②の対象者に対しては、道内観光最終宿泊地の宿泊施設内 ③の対象者に対しては、該当する各宿泊施設内 ④の対象者に対しては、各案内所窓口
調 査 場 所	留 置 き	ホテル、旅館、観光案内所	
	面 接 聞 取 り	889	
調 査 件 数	留 置 き	ホテル、旅館 79 観光案内所 173	
	合 計	1141	1015

〔奈良県の外国人観光客動向実態調査結果報告書〕3頁、「平成17年度訪日外国人来道者動態・満足度調査結果概要（本文）」1頁より作成。

第1表によって、今回の研究において資料として取扱った奈良県と北海道のアンケート調査について、それぞれの概要を述べておこう。

まず、奈良県のアンケート調査は「外国人観光客動向実態調査」である。訪日外国人の全てを対象としている。調査時期は2006年9月から11月までである。調査方法は面接による聞き取り調査と留置き調査である。まず前者の調査は、奈良市内では東大寺、薬師寺、そして斑鳩町の法隆寺、さらに奈良盆地南部の明日香村周辺を調査地点とした。英語、仏語、中国語、ハングル語を話す調査員を各1名づつ配置し、対象者から直接回答を得るものである。一方後者は、ホテルや旅館、観光案内所へ依頼し、アンケート調査用紙を配置し、協力願える旅行者に記入してもらい、回収容器に入れてもらう方法である。調査件数は、面接聞き取り調査によるものが889件、留置き調査ではホテルや旅館といった宿泊施設からの回収票が79件、観光案内所からのものが173件あり、合計では1141件になる。

次に、北海道のアンケート調査は「訪日外国人来道者動態・満足度調査」である。対象は2005年6月に策定をみた「北海道外客来訪促進計画」にあげられた誘客対象地域（前掲「計画」本文18ページ）にある台湾、香港、韓国、中国（本土）、オーストラリアからの訪日外国人来道者である。そして、その中で次の①から④までのいずれかに該当する者に絞り込んでいる。すなわち、①新千歳空港を経由して離道する方、②北海道内の旅行会社が催行する訪日旅行に参加した方、③宿泊拠点地区の宿泊客、④案内所の利用者である。調査期間は夏季と冬季に分かれている。前者は2005年7月から8月、後者は2006年1月から2月の間に実施したものである。調査実施地点は①の方には空港国際線出発カウンター付近や同ロビーで、②と③に対しては宿泊施設内で、④に対しては案内所窓口である。収集した調査票は合計で1015件である。

## 1. 東アジアから奈良県、北海道への訪日客の特徴

### 1) 送出国別調査件数

第2表 送出国別調査件数

国・地域		奈良県	北海道
アジア・太平洋	韓国	111 [26.8] (9.7)	153 [15.1]
	台湾	107 [25.8] (9.4)	417 [41.1]
	中国(本土)	98 [23.7] (8.6)	144 [14.2]
	香港		168 [16.6]
	オーストラリア	70 [16.9] (6.1)	133 [13.0]
	ニュージーランド	24 [5.8] (2.1)	
	その他	4 [1.0] (0.4)	
	小計	414 [100.0] (36.3)	
北米・西欧	アメリカ	205 (18.0)	
	カナダ	44 (3.9)	
	イギリス	98 (8.6)	
	フランス	92 (8.1)	
	ドイツ	41 (3.6)	
	その他	66 (5.8)	
	小計	546 (47.9)	
不明	7 (0.6)		
合計	1141 (100.0)	1015 [100.0]	

( ) 内の数値は、奈良県における調査全体の合計値に対する構成比、

訪日観光客のアンケート回答者の送出国別に件数と構成比をみておこう。第2表によれば、まず、奈良県では、アメリカからが200件台で数の上で最も多くなっている。構成比では唯一10%以上の割合を占めている。北米・西欧方面の国々の中でも抜きん出ている。次に100件台は韓国、台湾の順で、ほぼ並んでいる。いずれも、アジアの国々であり、全体を通しての構成比では、9%台である。さらに、90件台の国々では、中国(本土)、イギリスが同数、それからフランスが続いている。いずれも構成比は8%台である。ここまで、主要な送出国を検討した。これら上位国に続いて、オーストラリアが70件となっている。次に、北海道についてみておこう。既に述べたように、北海道の調査は誘客対象となる5つの国や地域に限定したものである。それらの中で、件数では台湾が400件台で抜きん出ており、構成比でも40%以上を占める。他の4カ国・地域はいずれも100件台である。構成比でも10%台である。

ここで、近年伸長著しいアジア・太平洋方面からのインバウンドの動向を、上述の北海道の結果と構成比を比較し、奈良県の特徴を検討しておこう。北海道では台湾の構成比が大変大きいものに対して、奈良県では、東アジアの3カ国が、韓国、台湾、中国(本土)の順で並び、構成比はいずれも20%台である。また、オーストラリアは奈良県は10%台の後半である。北海道は10%台の前半であるから、構成比の上では奈良県の方が大きい。

これから以降は、アンケート調査の結果をもとに、奈良県と北海道の比較分析を行う。ただし、奈良県の集計は使用言語を基準にしている。そのため便宜上、簡体字を中国、繁体字を台湾と置き換えた。

## 2) 訪日客の属性にみる特徴

第3表 男女別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	男性	女	計
中国	奈良県 (簡体字)	62 (60.8) [37.8]	40 (39.2) [24.2]	102 (100.0) [31.0]
	北海道	31 (45.6) 【11.9】	37 (54.4) 【11.6】	68 (100.0) 【11.8】
台湾	奈良県 (繁体字)	45 (42.5) [27.4]	61 (57.5) [37.0]	106 (100.0) [32.2]
	北海道	156 (40.7) 【60.0】	227 (59.3) 【71.2】	383 (100.0) 【66.1】
韓国	奈良県	57 (47.1) [34.8]	64 (52.9) [38.8]	121 (100.0) [36.8]
	北海道	73 (57.0) 【28.1】	55 (43.0) 【17.2】	128 (100.0) 【22.1】
合計	奈良県	164 (49.8) [100.0]	165 (50.2) [100.0]	329 (100.0) [100.0]
	北海道	260 (44.9) 【100.0】	319 (55.1) 【100.0】	579 (100.0) 【100.0】

第3表のよって訪日客の男女別の動向についてみておこう。男女の区別のわかるもののみを計数したので、必ずしも、先にみた訪日客数とは一致しない。そこで、送出国ごとの、道県別の男女の構成比の検討をしておこう。

中国からの場合、奈良県では、男性が6割を占める。これに対して、北海道では、女性が過半を占めている。台湾では、奈良県、北海道ともに、女性が過半を占めている。韓国の場合には、奈良県では、女性が過半を占めているのに対して、北海道では、男性の構成比が大きくなっている。

合計をみると、奈良県では、男女がほぼ同数になっているのに対して、北海道では女性が多くなっている。奈良県を訪れた男性訪日観光客の合計に対する送出国別の構成比をみると、中国、韓国が、30%台であり、台湾が20%台である。北海道では、台湾が60%で極めて多く、次に韓国が20%台、最後に中国が10%台になっている。

一方、女性の奈良県を訪れた訪日観光客の送出国の割合をみると、台湾と韓国が30%台の後半であるのに対して、中国が20%台である。次に北海道では、台湾が多く、70%台であり、次に韓国、中国の順で、いずれも20%台である。

計では、奈良県では、韓国、台湾、中国の順であるが、構成比で見るといずれも、30%台である。合計では、奈良県においては、韓国、台湾、中国の順になっているが、いずれも30%台である。一方、北海道では、台湾が60%台、韓国20%台、中国10%台の順になっている。

第4表 旅行者の年齢別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	30歳未満	30歳以上50歳未満	50歳以上	計
中国	奈良県 (簡体字)	30 (28.8) [30.0]	47 (45.2) [32.2]	27 (26.0) [29.7]	104 (100.0) [30.9]
	北海道	16 (23.5) 【8.8】	38 (55.9) 【12.3】	14 (20.6) 【15.1】	68 (100.0) 【11.6】
台湾	奈良県 (繁体字)	25 (22.5) [25.5]	64 (57.7) [43.8]	22 (19.8) [24.2]	111 (100.0) [32.9]
	北海道	130 (33.8) 【71.4】	209 (54.3) 【67.6】	46 (11.9) 【49.5】	385 (100.0) 【65.9】
韓国	奈良県	45 (36.9) [45.0]	35 (28.7) [24.0]	42 (34.4) [46.2]	122 (100.0) [36.2]
	北海道	36 (27.5) 【19.8】	62 (47.3) 【20.1】	33 (25.2) 【35.5】	131 (100.0) 【22.4】
合計	奈良県	100 (29.7) [100.0]	146 (43.3) [100.0]	91 (27.0) [100.0]	337 (100.0) [100.0]
	北海道	182 (31.2) 【100.0】	309 (52.9) 【100.0】	93 (15.9) 【100.0】	584 (100.0) 【100.0】

3国・地域からの訪日旅行者の年齢別にみた特徴を奈良県と北海道を比較検討しておこう(第4表)。まず、中国からの旅行者についてみると、奈良県では104件の中で、30歳以上50歳未満の年齢層が45%以上で最も構成比が大きくなっている。30歳未満と50歳以上は20%台の後半でほぼ同じくらいの構成比になっている。計68件の北海道でも奈良県と同様に、30歳以上50歳未満の年齢層が最も多くなっている。その構成比は50%を上回っており、その数値は、奈良県よりも大きい。

次に台湾についてみると、奈良県においては、111件の中で、30歳以上50歳未満の年齢層が最も多くなっており、構成比では50%台の後半になっている。30歳未満層と50歳以上層とは20%前後で、ほぼ同じような構成比になっている。北海道においては、385件の中で、30歳以上50歳未満が50%で、この点に関しては奈良県と同様な傾向になっている。30歳未満層では30%台であり、奈良県に比べて構成比が大きい。一方、50歳以上層では、10%台である。

さらに、韓国についてみておこう。奈良県では122件の内、30歳未満層と50歳以上層とがほぼ同程度の構成比となっている。30歳以上50歳未満層は20%台にとどまっている。北海道では131件の内、30歳以上50歳未満層が半数近くになっている。この点は奈良県との明確な違いである。一方で、30歳未満層と50歳以上層とがほぼ同程度の構成比となっているのは奈良県の傾向と近似している。ただし数値は20%台である。

最後に、合計については、奈良県では、337件の内、30歳以上50歳未満が40%以上である。30歳未満層と50歳以上層とは30%未満で、ほぼ同程度の構成比となっている。また、北海道でも30歳以上50歳未満が最も多く、584件の中で半数以上になっている。次いで、30歳未満が30%台になっている。そして、50歳以上は10%半ばにとどまっている。

さて、年齢層ごとに3国・地域の構成比について2道県の比較をしてみよう。まず、100件の30歳未満層の奈良県では韓国が最も多く、45%を占めている。続いて中国が30%、最後に台湾が25%である。一方、北海道では、182件の内、台湾が70%以上を占めている点が奈良県の場合と異なっている。残りは、韓国が20%で、中国は1割未満である。

次に、30歳以上50歳未満層の奈良県では、146件中、台湾が40%以上を占め、次いで中国、韓国の順で、それぞれ30%台、20%台になっている。一方、北海道では、309件中、台湾が70%近くになっている。次いで韓国、中国の順で、それぞれ20%台、10%台になっている。

それから50歳以上層の奈良県では、韓国が40%台で最も多く、次いで台湾、中国であるが、いずれも20%台である。一方北海道では、93件の中で、台湾の構成比が最も大きく50%近くになっている。次いで、韓国が30%である。中国は10%台に過ぎない。

最後に計では、奈良県は337件中、3国・地域がほぼ3分した形になっている。一方、北海道では、台湾が65%を占めている。韓国は20%台、中国は10%台である。

第5表 職業別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	学生	有職者	計
中国	奈良県 (簡体字)	17 (18.9) [40.0]	73 (81.1) [39.9]	90 (100.0) [39.3]
	北海道	4 (7.8) 【4.6】	47 (92.2) 【13.4】	51 (100.0) 【11.6】
台湾	奈良県 (繁体字)	4 (8.0) [8.7]	46 (92.0) [25.1]	50 (100.0) [21.8]
	北海道	62 (21.5) 【71.3】	227 (78.5) 【64.5】	289 (100.0) 【65.8】
韓国	奈良県	25 (28.1) [54.3]	64 (71.9) [35.0]	89 (100.0) [38.9]
	北海道	21 (21.2) 【24.1】	78 (78.8) 【22.1】	99 (100.0) 【22.6】
合計	奈良県	46 (20.1) [100.0]	183 (79.9) [100.0]	229 (100.0) [100.0]
	北海道	87 (19.8) 【100.0】	352 (80.2) 【100.0】	439 (100.0) 【100.0】

学生と有職者との別ではどうであろうか。まず、中国からの奈良県では、計90件の中で学生は2割弱、有職者は8割である。北海道では、計51件の中で学生は1割未満、有職者は9割を上回っている。このように中国からの訪日客は奈良県においても、北海道でも有職者のウエイトが大きい(第5表)。

次に台湾については、奈良県では、50件の中で、学生は1割未満、有職者は9割以上になっている。北海道では289件中の2割が学生である。

最後に、韓国については、奈良県では学生が89件中3割近くであり、有職者は7割台である。また、北海道でも2割近くが学生で、8割弱が有職者である。

合計については、奈良県でも、北海道でも学生が2割程度、有職者が8割ほどの構成になっている。  
道県ごとに学生と有職者ごとに3国・地域の構成比をみておこう。まず、奈良県の学生では、韓国が5割以上を占めている。そして中国が4割で続き、台湾は1割未満である。

有職者では、中国からが4割近くを占め、続いて韓国が3割半ばで、台湾からは2割台にとどまっている。計では、ほぼ、有職者の構成比がそのまま反映された形となっている。

一方、北海道では、学生に関しては、台湾からの訪日客が多く、7割台を占めている。韓国、中国はそれぞれ2割台と1割未満である。有職者についても台湾からがウエイトが大きく、6割台であり、韓国、中国がそれぞれ2割台、1割台となっている。計では有職者の構成比が反映された形になっている。

### 3) 旅行目的別にみた調査対象の特徴

第6表によって、送出国別に観光目的の旅行者の人数をみておこう。まず、中国からは、奈良県では49人、北海道では71人である。いずれの道県においても、観光目的の訪日が50%弱である。

第6表 旅行目的別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	観光	計
中国	奈良県 (簡体字)	49 (46.7) [18.9]	105 (100.0) [31.1]
	北海道	71 (49.3) 【11.5】	144 (100.0) 【20.2】
台湾	奈良県 (繁体字)	101 (90.2) [39.0]	112 (100.0) [33.1]
	北海道	407 (97.6) 【66.2】	417 (100.0) 【58.4】
韓国	奈良県	109 (90.1) [42.1]	121 (100.0) [35.8]
	北海道	137 (89.5) 【22.3】	153 (100.0) 【21.4】
合計	奈良県	259 (76.6) [100.0]	338 (100.0) [100.0]
	北海道	615 (86.1) 【100.0】	714 (100.0) 【100.0】

旅行の中で観光目的のみを記載し、合計はその他のものも含む。

北海道の「中国」は「本土」のみの数値である。

(「奈良県の外国人観光客動向実態調査結果報告書」、「平成17年度訪日外国人来道者動態(満足度)調査結果」より作成)。

台湾からは、奈良県では101人、北海道では407人である。いずれの道県においても、9割以上が観光目的の訪日であり、特に北海道へは、97%以上という効率になっている。

韓国からは、奈良県では109人、北海道では139人である。いずれの道県においても、ほぼ90%が観光目的の訪日であることがわかる。合計をみると奈良県では259人、北海道では615人である。構成比は、奈良県が70%台、北海道が80%台となっており、北海道の方が観光の構成比が大きくなっている。

計に占める送出3カ国の構成比をみると、奈良県では、台湾と韓国が40%前後、中国が2割弱になっているのに対して、北海道では、台湾からが60%台半ばで最も多く、韓国が2割台、中国が1割台となっ

いる。奈良県に比べて、北海道の観光目的の割合が大きいのは、この数値から、観光目的の台湾からの訪日観光客の多さを反映したものであるといえる。

訪日客全体では、送出国の構成比をみると、奈良県では、韓国、台湾、中国の順で、韓国が若干多く、なっているものの、いずれも100人台である。これに対して北海道は、全体でも台湾からの訪日客が6割近くを占める状況になっている。そして、中国と韓国がほぼ同じ位の構成比になっている。

## 2. 観光的観点からみた訪日客の特徴

### 1) 観光情報の入手手段別にみた特徴

第7表によって観光情報の入手手段別にみた送出国・地域の特徴を奈良県と北海道を構成比に依拠しつつ比較検討してみよう。まず、中国からの場合、奈良県に関する情報は4分の1以上が「インターネット」から収集している。ただし、「テレビ・ラジオ」や「新聞・雑誌などの印刷物」からの情報収集も20%台である。これらの他に「旅行会社」や「口コミ・その他」も10%である。

第7表 観光情報の入手手段別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	テレビ・ラジオ	新聞・雑誌などの印刷物	旅行会社	インターネット	口コミ・その他	計
中国	奈良県 (簡体字)	33 (21.3) [61.1]	31 (20.0) [43.0]	21 (13.5) [16.0]	41 (26.5) [32.0]	29 (18.7) [42.0]	155 (100.0) [34.1]
	北海道	47 (26.6) 【17.0】	62 (35.0) 【15.8】	33 (18.6) 【12.7】	26 (14.7) 【9.9】	9 (5.1) 【8.6】	177 (100.0) 【13.7】
台湾	奈良県 (繁体字)	20 (11.9) [37.0]	32 (19.2) [44.5]	51 (30.5) [38.9]	39 (23.4) [30.5]	25 (15.0) [36.2]	167 (100.0) [36.8]
	北海道	217 (23.6) 【78.3】	295 (32.1) 【75.3】	173 (18.8) 【66.5】	181 (19.7) 【68.8】	53 (5.8) 【51.0】	919 (100.0) 【70.9】
韓国	奈良県	1 (0.7) [1.9]	9 (6.8) [12.5]	59 (44.7) [45.1]	48 (36.4) [37.5]	15 (11.4) [21.7]	132 (100.0) [29.1]
	北海道	13 (6.5) 【4.7】	35 (17.5) 【8.9】	54 (27.0) 【20.8】	56 (28.0) 【21.3】	42 (21.0) 【40.4】	200 (100.0) 【15.4】
合計	奈良県	54 (11.8) [100.0]	72 (15.9) [100.0]	131 (28.9) [100.0]	128 (28.2) [100.0]	69 (15.2) [100.0]	454 (100.0) [100.0]
	北海道	277 (21.4) 【100.0】	392 (30.2) 【100.0】	260 (20.1) 【100.0】	263 (20.3) 【100.0】	104 (8.0) 【100.0】	1296 (100.0) 【100.0】

複数回答

一方、北海道の場合は、「新聞・雑誌などの印刷物」からの情報取得が35%を占めている。次いで「テレビ・ラジオ」からが4分の1以上を占めている。この2者で60%以上を占めている。これらの他には「旅行会社」「インターネット」が10%台の後半と前半で続いている。「口コミ・その他」は5%台に過ぎない。

次に、台湾についてみておこう。奈良県に対する情報は30%が「旅行会社」からであり、次いで、「インターネット」が20%台である。そして、「新聞・雑誌などの印刷物」が20%弱で続いている。これらの他には10%台で「口コミ・その他」「テレビ・ラジオ」、の順で続いている。



一方、北海道の場合は、「新聞・雑誌などの印刷物」からが30%、「テレビ・ラジオ」が20%台である。続いて、「インターネット」と「旅行会社」がともに20%弱である。「口コミ・その他」は5%台に過ぎない。

最後に、韓国についてみておこう。奈良県に対する情報取得は4割以上が「旅行会社」からである。続いて「インターネット」が30%の後半である。続いて「口コミ・その他」が10%台である。「新聞・雑誌などの印刷物」は1割に満たないし、「テレビ・ラジオ」はほとんどない。

一方、北海道の場合は、「インターネット」と「旅行会社」が20%台の後半で、ほぼ並んでいる。そして、ややあって「口コミ・その他」が20%台前半で続き、「新聞・雑誌などの印刷物」が10%台の後半である。「テレビ・ラジオ」は6%である。

## 2) 旅行形態別にみた特徴

旅行形態別ではどうであろうか。団体と個人について、その区別のわかるものについて、その構成比をみてみよう。第8表を使って、送出国・地域別に団体の動向をみると、まず中国から奈良県へは、団体が70%台であるのに対して、北海道は80%台である。次に、台湾からは、奈良県、北海道ともに80%以上が団体である。そして、韓国からでは、奈良県が60%台の前半、北海道は60%弱というように、ともに団体が60%前後になっている。

3国・地域の合計では、奈良県が70%台の前半、北海道が70%台の後半になっている。以上のように、団体のウエイトは奈良県では台湾、中国、韓国の順になっており、北海道では中国、台湾、韓国の順になっている。

第8表 旅行形態別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	団体	個人	計
中国	奈良県 (簡体字)	77 (78.6) [31.7]	21 (21.4) [25.0]	98 (100.0) [30.0]
	北海道	63 (88.7) 【13.1】	8 (11.3) 【6.1】	71 (100.0) 【11.6】
台湾	奈良県 (繁体字)	90 (81.8) [37.0]	20 (18.2) [23.8]	110 (100.0) [33.6]
	北海道	339 (83.3) 【70.3】	68 (16.7) 【51.9】	407 (100.0) 【66.4】
韓国	奈良県	76 (63.9) [31.3]	43 (36.1) [51.2]	119 (100.0) [36.4]
	北海道	80 (59.3) 【16.6】	55 (40.7) 【42.0】	135 (100.0) 【22.0】
合計	奈良県	243 (74.3) [100.0]	84 (25.7) [100.0]	327 (100.0) [100.0]
	北海道	482 (78.6) 【100.0】	131 (21.4) 【100.0】	613 (100.0) 【100.0】

次に、道県ごとに3国・地域の合計に対する構成比を団体についてみると、奈良県では、3国・地域ともに30%台である。個人については韓国からのウエイトが50%を上回っており、中国、台湾は20%台である。計では団体と同じように、3割台で並んでいる。

最後に北海道については、団体では、台湾からが70%以上を占め、中国と韓国は10%台である。個人では台湾が50%以上を占めており、次いで韓国が40%台、中国は1割未満である。計では台湾からが60%以上を占め、韓国からが20%台、中国からが10%台である。

### 3) 目的地訪問回数とそこでの滞在日数別にみた特徴

第9表 目的地訪問回数別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	初回	2～4回	5回以上	計
中国	奈良県 (簡体字)	93 (93.0) [31.6]	6 (6.0) [21.4]	1 (1.0) [20.0]	100 (100.0) [30.6]
	北海道	64 (90.1) 【13.0】	7 (9.9) 【6.9】	0 (0.0) 【0.0】	71 (100.0) 【11.6】
台湾	奈良県 (繁体字)	91 (85.1) [31.0]	13 (12.1) [46.5]	3 (2.8) [60.0]	107 (100.0) [32.7]
	北海道	312 (77.0) 【63.6】	77 (19.0) 【76.3】	16 (4.0) 【80.0】	405 (100.0) 【66.2】
韓国	奈良県	110 (91.7) [37.4]	9 (7.5) [32.1]	1 (0.8) [20.0]	120 (100.0) [36.7]
	北海道	115 (84.6) 【23.4】	17 (12.5) 【16.8】	4 (2.9) 【20.0】	136 (100.0) 【22.2】
合計	奈良県	294 (89.9) [100.0]	28 (8.6) [100.0]	5 (1.5) [100.0]	327 (100.0) [100.0]
	北海道	491 (80.3) 【100.0】	101 (16.5) 【100.0】	20 (3.2) 【100.0】	612 (100.0) 【100.0】

不明、その他を除く。

第9表は訪日回数を送出国・地域ごとに、奈良県と北海道を比較したものである。まず、中国からの訪日客については、奈良県の場合、90%以上が「初回」である。この傾向は北海道にあっても同様である。次に、台湾については、奈良県の場合、8割以上が「初回」であるものの、「2～4回」も1割以上である。北海道の場合も大筋の傾向は奈良県と近似しているが、構成比の上では「初回」が7割台で若干構成比が小さく、代わって「2～4回」が2割近くになっている。最後に韓国については、奈良県の場合、9割以上が「初回」である。北海道では、「初回」は8割台に止まり、「2～4回」が1割を上回っている。

第10表 訪問地滞在日数別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	2日以内	3～5日	6日以上	計
中国	奈良県 (簡体字)	83 (96.5) [48.0]	1 (1.2) [20.0]	2 (2.3) [100.0]	86 (100.0) [47.8]
	北海道	5 (7.5) 【100.0】	54 (80.6) 【11.0】	8 (11.9) 【9.8】	67 (100.0) 【11.6】
台湾	奈良県 (繁体字)	85 (95.5) [49.1]	4 (4.5) [80.0]	0 (0.0) [0.0]	89 (100.0) [49.4]
	北海道	0 (0.0) 【0.0】	317 (83.6) 【64.7】	62 (16.4) 【75.6】	379 (100.0) 【65.7】
韓国	奈良県	5 (100.0) [2.9]	0 (0.0) [0.0]	0 (0.0) [0.0]	5 (100.0) [2.8]
	北海道	0 (0.0) 【0.0】	119 (90.8) 【24.3】	12 (9.2) 【14.6】	131 (100.0) 【22.7】
合計	奈良県	173 (96.1) [100.0]	5 (2.8) [100.0]	2 (1.1) [100.0]	180 (100.0) [100.0]
	北海道	5 (0.9) 【100.0】	490 (84.9) 【100.0】	82 (14.2) 【100.0】	577 (100.0) 【100.0】

不明・その他は除外した。

訪日客の奈良県、北海道それぞれにおける滞在日数を送出国・地域別に比較しておこう。第10表によれば、まず、中国からの訪日客は奈良県では、ほとんどが「2日以内」(96%)である。一方、北海道では、8割以上が「3～5日」である。そして、「6日以上」も10%を上回り、「2日以内」は1割未満である。次に、台湾からの訪日客も、奈良県ではほとんど全てが「2日以内」である。一方、北海道でも、中国からの訪日客と同じ傾向を示し、8割以上が「3～5日」である。そして、「6日以上」が16%を上回っている。「2日以内」はいない。最後に、韓国からの場合は、奈良県の場合は標本数がわずかであるが、全て「2日以内」である。北海道の場合は、90%が「3日～5日」である。さらに「6日以上も」1割近くある。

### 3. 訪日客の行動と利用満足度

#### 1) 入国地と出国地と移動交通手段からみた特徴

日本への入国地点からみた特徴について比較してみよう(第11表)。まず中国からでは、奈良県へは大阪からの入国者の割合が最も多く、全体の70%を占めている。次いで、東京からが30%弱を占め、この両地点で100%である。一方、北海道へは東京からの入国者の割合が最も大きい50%台にとどまり、北海道へ直接入るケースのほか、名古屋や大阪からも10%台が続いている。

第11表 入国地からみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	北海道	東京	大阪	名古屋	福岡	計
中国	奈良県 (簡体字)	-	19 (29.2) [65.6]	46 (70.8) [22.3]	0 (0.0) [0.0]	0 (0.0) [0.0]	65 (100.0) [23.8]
	北海道	12 (17.9) 【2.4】	37 (55.3) 【66.1】	8 (11.9) 【33.3】	10 (14.9) 【90.9】	-	67 (100.0) 【11.3】
台湾	奈良県 (繁体字)	-	3 (3.1) [10.3]	88 (92.7) [42.7]	3 (3.1) [12.0]	1 (1.1) [7.7]	95 (100.0) [34.8]
	北海道	368 (92.9) 【73.6】	14 (3.5) 【25.0】	13 (3.3) 【54.2】	1 (0.3) 【9.1】	-	396 (100.0) 【67.0】
韓国	奈良県	-	7 (6.2) [24.1]	72 (63.7) [35.0]	22 (19.5) [88.0]	12 (10.6) [92.3]	113 (100.0) [41.4]
	北海道	120 (93.8) 【24.0】	5 (3.9) 【8.9】	3 (2.3) 【12.5】	0 (0.0) 【0.0】	-	128 (100.0) 【21.7】
合計	奈良県	-	29 (10.6) [100.0]	206 (75.5) [100.0]	25 (9.2) [100.0]	13 (4.7) [100.0]	273 (100.0) [100.0]
	北海道	500 (84.6) 【100.0】	56 (9.4) 【100.0】	24 (4.1) 【100.0】	11 (1.9) 【100.0】	-	591 (100.0) 【100.0】

「不明」「その他」は除外

次に台湾からの場合は、奈良県へは大阪からが全体の90%以上を占めている。一方、北海道へは90%以上が、北海道内の空港を利用している。最後に韓国からは、奈良県へは大阪からが75%以上を占め、他には名古屋が20%弱となっている。福岡も10%台である。これに対して北海道では、道内へ直接入るケースが90%以上を占めている。

奈良県と北海道それぞれへの、インバウンドの入国地ごとに、国・地域別の構成比を比較しておこう。

まず、北海道を入国地とする場合は、奈良県は数値が存在しない。一方、北海道は台湾からが70%以上を占めている。次いで、韓国がおおよそ4分の1、中国は2%台に過ぎない。

東京を入国地とする場合は奈良県は中国65%以上を占め、次いで、韓国がおおよそ4分の1以下である。台湾は10%程度である。これに対して、北海道も中国が66%で最も多いが、次が台湾で4分の1、最後が韓国で1割未満である。

大阪を入国地とする場合は、奈良県へは、台湾が40%台で最も多いが、韓国30%台、中国20%台と続いている。北海道へは台湾からが50%以上である。次いで、中国からが30%台、韓国からが10%台となっている。

名古屋を入国地とする場合は、奈良県へは、韓国からが9割近くになっている。そして、台湾からが10%台である。中国からはいない。北海道へは、中国からが90%以上である。それから台湾であり、韓国はない。

最後に、福岡からの入国の場合は奈良県へはほぼ韓国のみである。北海道への数値は存在しない。

第12表 出国地からみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	北海道	東京	大阪	名古屋	福岡	計
中国	奈良県 (簡体字)	-	7 (12.7) [26.9]	47 (85.5) [24.7]	1 (1.8) [16.7]	0 (0.0) [0.0]	55 (100.0) [22.3]
	北海道	19 (27.5) 【3.7】	44 (63.8) 【66.7】	6 (8.7) 【40.0】	0 (0.0) 【0.0】	-	69 (100.0) 【11.5】
台湾	奈良県 (繁体字)	-	7 (8.8) [26.9]	67 (83.8) [35.3]	5 (6.2) [83.3]	1 (1.2) [4.0]	80 (100.0) [32.4]
	北海道	372 (93.0) 【72.0】	17 (4.3) 【25.8】	9 (2.2) 【60.0】	2 (0.5) 【66.7】	-	400 (100.0) 【66.6】
韓国	奈良県	-	12 (10.7) [46.2]	76 (67.9) [40.0]	0 (0.0) [0.0]	24 (21.4) [96.0]	112 (100.0) [45.3]
	北海道	126 (95.5) 【24.3】	5 (3.8) 【7.5】	0 (0.0) 【0.0】	1 (0.7) 【33.3】	-	132 (100.0) 【21.9】
合計	奈良県	-	26 (10.5) [100.0]	190 (77.0) [100.0]	6 (2.4) [100.0]	25 (10.1) [100.0]	247 (100.0) [100.0]
	北海道	517 (86.0) 【100.0】	66 (11.0) 【100.0】	15 (2.5) 【100.0】	3 (0.5) 【100.0】	-	601 (100.0) 【100.0】

「不明」「その他」は除外

第12表によって、日本からの出国地からみた特徴を比較してみよう。まず、中国への出国者についてみると、奈良県からは、大阪からの出国者の割合が最も多く、全体の80%を占めている。次いで、東京からが10%台を占め、この両地点でほぼ100%に近い。一方、北海道からは、東京からの出国者の割合が最も大きく60%台であり、北海道から直接出るケースが30%近くある。ほかに大阪からも若干あることがわかる。

次に台湾への場合、奈良県からは、大阪からが全体の80%を占め、その他では、東京、名古屋、福岡の順で若干ある。一方、北海道からは90%以上が、北海道内の空港を利用し、その他には、東京、大阪、名古屋の順に若干ある。

最後に韓国へは、奈良県からは、大阪からが60%台の後半を占め、福岡も20%台である。さらに東京からも10%台である。これに対して北海道からは、道内から直接出るケースが90%以上を占め、東京からは10%未満になっている。

奈良県と北海道それぞれへの、インバウンドの出国地ごとに、国・地域別の構成比を比較しておこう。まず、北海道を出国地とする場合は、奈良県は数値が存在しない。一方、北海道からは台湾が70%以上を占めている。次いで、韓国がおよそ4分の1、中国は3%台に過ぎない。

東京を出国地とする場合は、奈良県からは韓国が40%台を占め、次いで、中国と台湾が同じ構成比である。これに対して、北海道からは中国が66%で最も多いが、次が台湾で4分の1、最後が韓国で1割未満である。

大阪を出国地とする場合は、奈良県からは、韓国が40%台で最も多いが、台湾30%台、中国20%台と続いている。北海道からは台湾が60%である。次いで、中国が40%であり、韓国へはない。

名古屋を出国地とする場合は、奈良県からは、台湾が8割以上になっている。そして、中国が10%台である。韓国へはない。北海道からは、台湾が60%以上である。それから韓国であり、中国はない。最後に、福岡からの出国の場合は奈良県からはほぼ韓国のみである。北海道からの数値は存在しない。

第13表は奈良県と北海道それぞれへの移動交通手段について比較したものである。ただし、北海道については道内移動に使用した交通機関に限定している。まず、中国からの訪日客についてみておこう。奈良県の場合は、バスが50%以上を占めている。次いで鉄道が20%、航空機が16%である。北海道の場合は、道内の移動はほとんどがバスの利用であることが明らかになった。

第13表 移動手段別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	鉄道	バス	飛行機	その他	計
中国	奈良県 (簡体字)	25 (20.2) [20.5]	67 (54.0) [29.3]	20 (16.1) [71.4]	12 (9.7) [75.0]	124 (100.0) [31.5]
	北海道	2 (2.6) 【2.2】	69 (90.9) 【13.9】	2 (2.6) 【13.3】	3 (3.9) 【7.5】	76 (100.0) 【11.8】
台湾	奈良県 (繁体字)	58 (41.4) [47.5]	74 (52.9) [32.5]	5 (3.6) [17.9]	3 (2.1) [18.8]	140 (100.0) [35.5]
	北海道	73 (15.4) 【81.1】	357 (75.3) 【71.8】	11 (2.3) 【73.4】	33 (7.0) 【82.5】	474 (100.0) 【73.9】
韓国	奈良県	39 (30.0) [32.0]	87 (66.9) [38.2]	3 (2.3) [10.7]	1 (0.8) [6.2]	130 (100.0) [33.0]
	北海道	15 (16.3) 【16.7】	71 (77.2) 【14.3】	2 (2.2) 【13.3】	4 (4.3) 【10.0】	92 (100.0) 【14.3】
合計	奈良県	122 (31.0) [100.0]	228 (57.9) [100.0]	28 (7.1) [100.0]	16 (4.0) [100.0]	394 (100.0) [100.0]
	北海道	90 (14.0) 【100.0】	497 (77.5) 【100.0】	15 (2.3) 【100.0】	40 (6.2) 【100.0】	642 (100.0) 【100.0】

北海道は道内のみ

次に台湾の訪日客については、奈良県の場合は、バスが50%を上回っている。次いで鉄道が40%台である。一方、北海道の場合は、バスが4分の3を超えており、奈良県に比べてバスのウエイトが一層大きくなっている。北海道の場合、鉄道は15%程度である。

最後に、韓国からの訪日客の状況についてみておこう。まず、奈良県の場合は、バスの利用が7割近くになっている。鉄道は3割である。これに対して、北海道では、バスが初8割近くで、鉄道は2割未満である。

## 2) 訪問観光対象別にみた調査対象の特徴

訪日客について、訪問対象の性格ごとの構成比の違いを奈良県と北海道について比較してみよう。第14表を参照されたい。まず、奈良県への中国からの訪日客では、「歴史・文化」が60%弱であり、「自然」は40%台の前半である。北海道では90%近くが「自然」である。

第14表 訪問対象別にみた調査対象の特徴

国・地域	道・県	歴史・文化	自然	計
中国	奈良県 (簡体字)	66 (57.9) [26.9]	48 (42.1) [40.3]	114 (100.0) [31.3]
	北海道	9 (11.5) 【6.1】	69 (88.5) 【9.5】	78 (100.0) 【8.9】
台湾	奈良県 (繁体字)	83 (60.1) [33.9]	55 (39.9) [46.3]	138 (100.0) [37.9]
	北海道	98 (14.8) 【66.2】	562 (85.2) 【77.2】	660 (100.0) 【75.3】
韓国	奈良県	96 (85.7) [39.2]	16 (14.3) [13.4]	112 (100.0) [30.8]
	北海道	41 (29.7) 【27.7】	97 (70.3) 【13.3】	138 (100.0) 【15.8】
合計	奈良県	245 (67.3) [100.0]	119 (32.7) [100.0]	364 (100.0) [100.0]
	北海道	148 (16.9) 【100.0】	728 (83.1) 【100.0】	876 (100.0) 【100.0】

北海道の集計では、「自然鑑賞」「花名所」「流水」を「自然」に分類した。  
また、同様に「文化施設」「アイヌ文化」を「歴史・文化」に分類した。  
上記の2項目に該当しないものは除外した。

台湾については、奈良県の場合、「歴史・文化」が60%を占めている。「自然」は40%弱である。北海道の場合、「自然」が85%を占めている。

韓国では、奈良県の場合「歴史・文化」が85%を占めている。これに対して、北海道では、70%が「自然」である。

### 3) 観光地におけるみやげもの・食事・交通機関の満足度

第15表 観光地におけるみやげものの印象

国・地域	道・県	満足	普通	不満	計
中国	奈良県 (簡体字)	89 (93.7) [34.2]	5 (5.3) [10.4]	1 (1.0) [33.3]	95 (100.0) [30.5]
	北海道	52 (81.3) 【13.9】	11 (17.2) 【7.6】	1 (1.5) 【8.3】	64 (100.0) 【12.0】
台湾	奈良県 (繁体字)	87 (81.3) [33.5]	19 (17.8) [9.6]	1 (0.9) [33.3]	107 (100.0) [34.4]
	北海道	260 (74.9) 【69.7】	84 (24.2) 【57.9】	3 (0.9) 【25.0】	347 (100.0) 【65.5】
韓国	奈良県	84 (77.1) [32.3]	24 (22.0) [50.0]	1 (0.9) [33.4]	109 (100.0) [35.1]
	北海道	61 (51.3) 【16.4】	50 (42.0) 【34.5】	8 (6.7) 【66.7】	119 (100.0) 【22.5】
合計	奈良県	260 (83.6) [100.0]	48 (15.4) [100.0]	3 (1.0) [100.0]	311 (100.0) [100.0]
	北海道	373 (70.4) 【100.0】	145 (27.4) 【100.0】	12 (2.2) 【100.0】	530 (100.0) 【100.0】

報告書にある「満足」と「やや満足」を満足とし、「不満」と「やや不満」を不満として集計した。

第15表はみやげものの購入に関する満足度を送出国・地域別に、奈良県と北海道を比較したものである。まず、中国の訪日客については、奈良県の場合は90%以上が「満足」と答えている。北海道については「満足」の構成比は80%台になり、代わって「普通」が20%弱になっている。次に、台湾については、奈良県の場合は「満足」が80%台であり、「普通」が20%弱になっている。北海道の場合は「満足」は70%台に下がり、「普通」が20%台になっている。最後に、韓国については、奈良県の場合は「満足」が70%台後半で、「普通」が20%台になっている。北海道の場合は「満足」は50%台に止まり、「普通」が40%台になっている。



第16表 観光地における食事の満足度

国・地域	道・県	満足	普通	不満	計
中国	奈良県 (簡体字)	58 (66.7) [35.6]	23 (26.4) [19.0]	6 (6.9) [54.5]	87 (100.0) [29.5]
	北海道	50 (78.1) 【11.0】	14 (21.9) 【15.9】	0 (0.0) 【0.0】	64 (100.0) 【11.4】
台湾	奈良県 (繁体字)	66 (64.1) [40.5]	37 (35.9) [30.6]	0 (0.0) [0.0]	103 (100.0) [34.9]
	北海道	291 (79.8) 【64.1】	60 (16.4) 【68.2】	14 (3.8) 【82.4】	365 (100.0) 【65.3】
韓国	奈良県	39 (37.1) [23.9]	61 (58.1) [50.4]	5 (4.8) [45.5]	105 (100.0) [35.6]
	北海道	113 (86.9) 【24.9】	14 (10.8) 【15.9】	3 (2.3) 【17.6】	130 (100.0) 【23.3】
合計	奈良県	163 (55.3) [100.0]	121 (41.0) [100.0]	11 (3.7) [100.0]	295 (100.0) [100.0]
	北海道	454 (81.2) 【100.0】	88 (15.7) 【100.0】	17 (3.1) 【100.0】	559 (100.0) 【100.0】

第16表は食事に関する満足度を送出国・地域別に、奈良県と北海道を比較したものである。まず、中国の訪日客については、奈良県の場合は「満足」は60%台である。そして、「普通」が20%台の後半になっている。さらに「不満」も構成比で見ると限り7%近くになっている。北海道の場合は、「満足」との回答は80%近いものの、「普通」とした回答も20%を上回っている。次に、台湾については、奈良県の場合は「満足」は60%台で「普通」は30%台である。北海道の場合は「満足」は80%近いが、「普通」10%台後半、「不満」も4%近い。最後に、韓国については、奈良県の場合は「満足」は30%台後半に止まり、「普通」が60%近くで「満足」を上回っている。さらに「不満」も数パーセントある。一方、北海道の場合は、「満足」は90%近く、「普通」の10%台に比べて大きく、奈良県の構成比の状況とも大きく異なっている。

第17表 観光地における交通機関の満足度

国・地域	道・県	満足	普通	不満	計
中国	奈良県 (簡体字)	75 (81.5) [33.6]	17 (18.5) [21.5]	0 (0.0) [0.0]	92 (100.0) [30.3]
	北海道	47 (85.5) 【11.4】	7 (12.7) 【7.4】	1 (1.8) 【7.1】	55 (100.0) 【10.5】
台湾	奈良県 (繁体字)	78 (74.3) [35.0]	27 (25.7) [34.2]	0 (0.0) [0.0]	105 (100.0) [34.5]
	北海道	270 (79.6) 【65.2】	63 (18.6) 【67.0】	6 (1.8) 【42.9】	339 (100.0) 【64.9】
韓国	奈良県	70 (65.4) [31.4]	35 (32.7) [44.3]	2 (1.9) [100.0]	107 (100.0) [35.2]
	北海道	97 (75.8) 【23.4】	24 (18.8) 【25.6】	7 (5.4) 【50.0】	128 (100.0) 【24.6】
合計	奈良県	223 (73.4) [100.0]	79 (26.0) [100.0]	2 (0.6) [100.0]	304 (100.0) [100.0]
	北海道	414 (79.3) 【100.0】	94 (18.0) 【100.0】	14 (2.7) 【100.0】	522 (100.0) 【100.0】

第17表は交通機関に関する印象を尋ねた結果をまとめたものである。送出国・地域別に、奈良県と北海道を比較して示した。まず、中国からの訪日客については、奈良県の場合は「満足」が80%以上になっている。「普通」との回答は20%弱である。続いて、北海道の場合は、ほぼ奈良県の場合と同様な傾向になっている。即ち、「満足」が80%台で、「普通」が10%台となっている。次に、台湾からについては、奈良県の場合は「満足」は70%台の前半で、「普通」は4分の1である。北海道の場合は奈良県よりも「満足」の構成比が若干大きく80%近くになっている。「普通」は20%弱である。最後に、韓国からについては、奈良県の場合、「満足」は60%台半ばに止まり、「普通」が30%台になっている。一方、北海道は「満足」が70%半ばであり、奈良県と比べると10%程度大きい。「普通」は20%台弱である。ただ、「不満」が5%台である。

#### まとめ

小松原尚(2007:87-92)にて明らかにしたように、近年のインターネット利用者の拡大にはめざましいものがある。インターネットで獲得した情報が観光地に対する具体的なイメージとなり、観光行動を引き起こす重要な契機になっていることも少なくない。また、仮想空間にあっては距離的に隔たった観光地が同一面で比較可能になり、国内、国外を問わず競争関係になることも多い。日本国内にあっては大都市圏居住者にとっては日常的な生活空間とは異なった場所に対する関心は高い。北海道の雄大な自然景観や奈良、京都の古都の歴史的文化的環境のいずれも、観光行動を喚起するに十分な観光資源であり、その価値はインターナショナルレベルのものと考えられる。

本稿ではこうしたインターネットを介した観光情報の取得とイメージ形成が、近年増加しつつあるアジア、中でも東アジアからの訪日観光客にとっても同様の状況でみられるのか、それとも国や地域にとって、

さらには観光目的地によって異なった対応がみられるのかどうかということも検討課題の1つであった。その結果、国・地域によって情報源は必ずしもネット経由が大きいとはいえないということがわかった。さらに、奈良県を対象とする場合と、北海道を対象とする場合とでもネットの軽重が異なることがわかった。奈良県への訪日客では、3国・地域ともに、上位1、2位に情報収集源としてインターネットをあげている。一方、北海道では、韓国からの訪日客でインターネット利用があがっている他は中国、台湾ともインターネットはあがっていない。その代わりに、旅行会社が上位にあがっている。このようにインターネットを情報源とするケースは奈良県と北海道とでは異なっている。

奈良県が実施したものと、北海道が実施した実態調査に関して、観光対象に関する回答の中から、自然を対象にしたものと、歴史・文化のそれとを抽出した。その結果、北海道に関しては自然を対象としてものが圧倒的に多い。これに対して奈良県は歴史・文化についての関心が高いのと言うまでもないが、自然に関する点も相当に高いことがわかった。国内の調査の分析で指摘しておいた奈良の観光は歴史文化的なもの、自然環境とが複合的に捉えられているということが東アジアのインバウンドについても指摘できる可能性があることを示している。したがって、歴史・文化だけではない奈良への関心も認識されている。この点は買物や食事に関する指摘もできる。旅の楽しみの中で占める割合が少なくないこれらは、意向調査の中から、満足以外の割合を、非満足率として、整理してみた。すると、奈良県において、食事に関する非満足率が大きいことがわかった。中でも、韓国にあっては、50%以上の数値を示していることがわかった。奈良県にあっては観光資源の多様性と情報提供の方法に工夫の余地を残していると考えられる。

観光客として2回以上訪れたケースをリピーターとして位置付けその構成比を検討した。奈良県と北海道を比較してみると、全体的に北海道の方のリピーター率が大きい。国・地域別にみると台湾からの訪日客にリピーター率が大きいことがわかった。この点からも奈良県における工夫が必要なる。

インバウンドの日本国内における動きを類推してみた。入国地と出国地それぞれについて、発生率10%以上の地点を抽出した。その結果によると、中国からの訪日客は東京と大阪を軸とした入国、出国のパターンであることが明らかになった。これと対比的に、台湾からの訪日客は、それぞれの目的地に直近の地点を入国、出国地としていることも明らかになった。韓国は北海道については道内空港を利用しているものの奈良県に関しては、大阪以外にも入国、出国地があることもわかった。観光地あるいは観光圏域内の利用交通手段については、奈良県にあってはバスを主として、それに鉄道を加えた利用形態になっている。一方の北海道は、バスを移動の中心的手段としていることがわかった。最後に、滞在期間に関しては、奈良県では2日以内、短時間の滞在にとどまっているが、北海道にあっては、相対的に長期の滞在期間になっている。

大都市がインバウンドにとって最大のディスティネーションであることは今後も変化ないと考えられる。この前提にたてば、大都市との機能的連関を踏まえ、これまでの入国、出国地から、それぞれの観光地の特性を考慮した、目的地までのコース設定が、今後必要となろう。

本稿の骨子は、日本観光学会第97回全国大会研究発表会（2008年6月7日、北海商科大学）にて報告した。

## 文献

小松原尚 2007.『地域からみる観光学』大学教育出版.

清水伊織・祖田亮次 2005. 北海道におけるアジアからのインバウンド・ツーリズム. 北海道地理80: 25-39.